



皮と革

そのだ ひさこ

肩をすぼめる寒い冬の季節。それは私が大好きな革ジャンパーを着る季節である。私は古着屋で買った黒の革のブレザーをはじめ、ラビットのふかふかの毛や、茶や赤の革ジャンパーなどをワンピースの上に羽織るのが大好きである。コサージュやブレスレットなどの小物も革製を身につけている。けれど、日本社会では若者以外は革のコートやジャンパーを日常的に着ている人をあまり見かけず、まして私のような“中年”の年齢層にはほとんどいない。衣類も身だしなみの一つだから自由なのだが、ちらっと視線が向けられることもある。革は木綿や絹などと同じくそれ自体が呼吸する繊維であり、温かく身体にもよいものである。気づくと日本には皮革の雑誌、皮革の資料館、皮革の博物館など

● 問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当

を身近に見かけることがない。それはどうしてなのだろう。その理由の一つに日本は古代以来“米”という草を税(年貢)として国の土台にしてきた「草食文化」の国であるということではないだろうか。

日本の国の中では古来年貢を納める“農”に関わる人が社会の大多数で、古い・祝い・踊りなどの芸能系の人、動物を解体して太鼓や革靴をつくったりする物作りの人、庭作りや石垣作りなどの人々のプロの技は必要不可欠でも、社会的には絶対的に少数派だった。少数派は社会的には低く置かれてきた。それに対して欧米などの牧畜文化の国々では飼育した家畜を自ら屠殺(とさつ)・解体し、食肉や牛乳をはじめチーズもバターも手作りし、内臓もきれいに洗っておいしいフランクフルトソーセージやウインナーを手作りしてきた。そういう国では動物に関わる仕事をする人々をさげすむことはしない。皮や革が日常の生活の中にあるの

が普通のことだったから。これが部落差別が日本にしか存在しない理由の一つである。

実は、私が皮に一番魅せられた始まりは和太鼓とその音である。あの体中にズン、ズンと響く音！まるで大地の鼓動、地球の鼓動のよう。大学生を太鼓作りや太鼓演奏の見学に連れていったりした。面積が一番広いメス牛のお腹から大きな太鼓はつくられる。太鼓の胴に張られた皮に数ミリの厚みの違いがあれば、皮は何百万回の強打に耐えることができる。太鼓作りはそんなスーパードプロの技である。そのプロの誇りは太鼓の胴の中に描かれた「花押」というサインに残されている。我が家にある皮のとれた古太鼓の中に名人の花押がくっきり見える。箱崎宮の太鼓をつくった名人である。今も日本列島の隅々まで太鼓のないお祭りはない。

ソボクなギモン

「ルビ」とは？

分かりやすい広報紙づくり

「ルビ」とは、漢字などにつける振り仮名のことです。「広報ちくしの」では、コーナー名や記事のタイトルなどにルビを入れています。これは、さまざまな理由で読み書きが不自由な人や外国人などに配慮したものです。

「筑紫野市」、「平成」など頻繁に使用する漢字のルビは省略しています。本文は文字が小さいためルビは入れていませんが、常用漢字(義務教育で習う漢字)でない漢字は、ひらがなや別の言葉に言い換えたりしています。他にも、文字サイズや行間(行と行の間隔)に注意し、すべての人にとって読みやすく、分かりやすい広報紙づくりを心がけています。

